



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 学習者が日本語母語話者の非流暢性に見る「母語話者らしさ」とその運用意向                                               |
| Author(s)        | 佐藤, 淳子; SATO, Junko                                                               |
| Citation         | 日本語・国際教育研究紀要, 28, 38-55                                                           |
| Issue Date       | 2025-03                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/94297">https://hdl.handle.net/2115/94297</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 28_p38.pdf                                                                        |



# 学習者が日本語母語話者の非流暢性に見る 「母語話者らしさ」とその運用意向

佐 藤 淳 子

## 要 旨

母語話者の発話にもポーズや修復などの非流暢性が現れる。それらの中にはコミュニケーション上の機能を有するものもあることが明らかになってきているが、そのような非流暢性は日本語教育の現場では学習項目としてほとんど取り入れられていない。今後どのような非流暢性を教育現場に落とし込んでいくかという議論を深めていくために、本研究では従来の研究では着目されてこなかった「学習者は母語話者の非流暢性をどう受け止めているのか」という視点から探索的なアプローチを試みた。中級日本語学習者23名を対象にした調査の結果、母語話者が使用する「音声的に短く発話の流れの阻害を最小限に留めるようなフィラー」や、「『教科書的で正式』ではない語順での発話」の習得を望む傾向がうかがえた。

【キーワード】 非流暢性、コミュニケーション方略、

中級日本語学習者、気づき、perceptual fluency

## 1. 問題の所在

非母語話者の発話の流暢さ (fluency) は「沈黙や言い淀みに遮られることなく母語話者と同じテンポで話すこと (筆者訳)」(Lennon 1990 : 390) と考えられており、長い間、第二言語習得研究の分野では、ポーズや言い淀みなどは「非流暢性 (disfluency) を示す発話」で、これらが減っていくことが習得のひとつの目安であると捉えられてきた。しかし、ポーズ (無声の沈黙や有声のフィラーを含む) や修復 (繰り返し、言い換え、言い直し、言い淀みを含む) は母語話者の発話にも多く含まれており、かつ、それらは話し手が聞き手に配慮して用いるコミュニケーション方略として機能していることも明らかになってきている (伝・渡辺 2009 など)。

一方、日本語教育の現場ではフィラー以外の非流暢性は学習項目としてはほとんど取り扱われてはいない（船橋 2019）。次章で触れるように母語話者発話における具体的な非流暢性の現れ方や機能は徐々に明らかになってきてはいるが、非流暢性をどのように教えるかという議論はまだ成熟しているとはいえない。今後の議論では、(a) 非流暢性に関するデータの蓄積、(b) 「コミュニケーション方略（以下CS）として機能する非流暢性」の概念整理、(c) どの非流暢性を現場で取り扱うかの検討、といった論点からのアプローチが必要であると思われる。

以下、先行研究を援用しながら (a) のデータ蓄積、(b) の概念整理について述べ、そのうえで先行研究ではもっとも議論が進んでいないと思われる (c) の観点について、本研究の調査課題を提示する。

## 2. CSとしての機能する非流暢性の例

話し手が情報伝達の際、聞き手の理解に配慮して意図的に用いる方略をコミュニケーション方略という。伝・渡辺（2009）では、CSとして機能する日本語の非流暢性に関わる諸研究が概説されている。例えば、「や、山口と」のような節頭の音の繰り返しは、「甲府と、あ静岡と」のような置換型の言い直しとは異なり、未完成の発話を中断することで、発話プランニング（次小節で詳説）の時間を確保し、中断後の流暢な発話を継続するために機能していると見られる（伝 2007）。フィラーについても、発する節の長さが長いほど、プランニング負荷の高まる節頭のフィラーの出現率が高いこと（Watanabe 2003）などが明らかになっている。

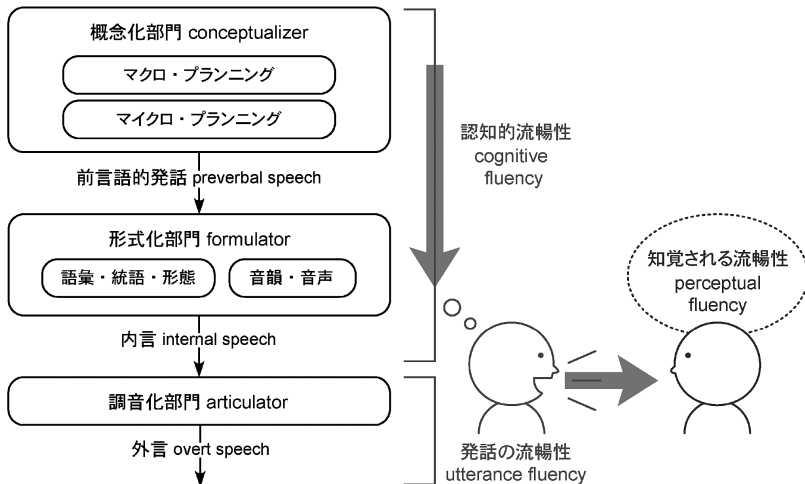
他にも挿入構造（丸山 2014）や自問発話に関する考察（丸山 2021）、相手の発話を受けての助詞で始める発話（船橋ほか 2021）など、個別の現象の記述とそれがどう機能しているかに関する知見は徐々に蓄積されてきている。その一方で、非流暢性の全体像を捉えるような分析やモデルの考察はまだ不十分である。次章でCSとして機能する非流暢性とは何かを整理し、本研究における定義づけを行う。

## 3. CSとして機能する非流暢性の概念整理

流暢性に関わる研究をメタ分析したSegalowitz（2010）によれば、「流暢性」は認知的流暢性（cognitive fluency）、発話の流暢性（utterance

fluency)、知覚される流暢性 (perceptual fluency) の3つの構成要素から成る<sup>1)</sup>。認知的流暢性は発話を物理的な音として外化する前の発話計画のスムーズさを指しており、Levelt (1989) やKormos (2006) のスピーチ・プロダクション・モデルの概念化部門 (conceptualizer) と形式化部門 (formulator) での処理のスムーズさに相当すると思われる (図1)。

概念化部門は伝える内容を計画するモジュールであり、さらにその下位分類としてマクロ・プランニングと、マイクロ・プランニングの2つのステージがある。前者は、発話によって成し遂げたい目的や発話意図を計画するステージであり、例えば「～をお願いする」「～について意見を求める」「状況を説明する」など、発話によって成し遂げたい行為を計画するステージである。後者は「その話者による発話意図の精緻化 (the speaker' s elaboration of a communicative intention)」(Levelt 1989 : 5) を行うステージであり、目的を成し遂げるためにどのような情報が必要かを状況や相手に合わせて計画する。



【図1】「スピーチ・プロダクション・モデル」と「流暢性の構成要素」

Levelt (1989)、Kormos (2006) のスピーチ・プロダクション・モデルと Segalowitz (2010) の非流暢性の3構成要素を参考に筆者作成

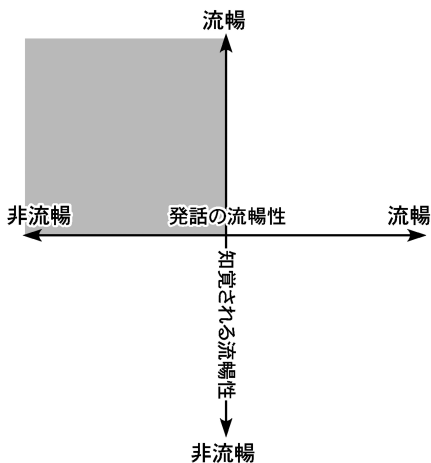
概念化部門で計画された前言語的発話 (preverbal speech) は形式化部門で符号化される。ここで必要な語の選択や統語的な処理が施され、調音器官に送る直前の内言 (internal speech) までは計画される。認知的流暢性は内言を計画するまでのスムーズさに該当すると考えられ、母語発話であっても複雑な内容の計画や使用頻度の低い語彙や表現を使用する際、また言語使用場面によってはこの認知的流暢性が低下する。

発話の流暢性は物理的で計測可能な音、つまりスピーチ・プロダクション・モデルの調音化部門 (articulator) を経て外化された外言 (overt speech) のスムーズさである。これは観察可能であり、流暢性や非流暢性に関する従来の定義はこの発話の流暢性を問題にしている。

母語話者の発話データから非流暢性を考察してきた諸研究は、観察可能な非流暢性(発話の流暢性の範疇)を分析対象として、その背景にある発話計画との関わり(認知的流暢性の範疇)を論じているといえる。

さて、発話計画の段階でどのような意図があったにせよ、また、意図せず結果的に非流暢になったにせよ、発話の流暢性の観点のみから分類すれば(図2の横軸)、すべてのフィラーや修復が非流暢であると捉えられる。しかし知覚される流暢性の観点、すなわち聞き手がその非流暢性をスムーズな情報伝達を遮るものと感じるかどうかという側面を加えると(図2の縦軸)、物理的には非流暢であっても聞き手にとって話し手側のエラーや乱れとは認識されないものもある。

非流暢性を伴うロボットに関する研究をしている松下ほか(2018)は自然な発話における非流暢な振る舞いは「行為主体である話し手とその(社会的な)環境となる聞き手との関わりの中で、相互に調整を行う結果として生



【図2】外化された観察可能な流暢性と聞き手が感じる流暢性 (筆者作成)

み出されたもの」(松下ほか 2018: 109)としている。コミュニケーションのブレイクダウンを起こすことなく使用されている非流暢性を定義する際には、聞き手側の参与も話し手同様に重視すべきであり、日本語教育の現場で扱うべき「CSとして機能する非流暢性」は図2の左上の象限の部分であると捉えられる。そこで本稿では「CSとして機能する非流暢性」を「物理的な音や形態としては発話の流れを遮る要素であるものの、聞き手側にはエラーや乱れとは認識されず、情報伝達の相互作用の調整の役割を果たすもの」と定義する。

#### 4. どの非流暢性を日本語教育現場で取り扱うか

先述のように、発話の中で観察される非流暢性の形式や機能については徐々に個別の事例の蓄積が進んできている。これらが日本語教育現場で取り上げる項目を考える際のベースにはなるが、収集された非流暢性のうちの項目を扱うべきかについてはさらなる議論が必要となる。

流暢性と非流暢性をめぐる諸研究や議論をメタ的に分析し検討した Lickley (2015) は、第二言語話者が母語話者と同様の熟達度に到達したいのならば、「適切な母語話者らしい言い淀み (appropriate native-like hesitation)」や、「母語話者らしい言い間違いや修復 (native-like speech error and repair)」の習得が必要だと論じている。ここで Lickley は母語話者を「誤りのないスムーズな話者」と捉えているわけではないが、非流暢性の運用も含めて「母語話者」が目指すべき姿なのかについては慎重に検討しなければならない。先行研究では、母語話者が用いるポーズや言い淀み、繰り返しは聞き手に非流暢性を感じさせないのに対し、学習者の発話にそれらが現れると「非母語話者である」「非流暢性である」と受け取られる傾向があることも示されている (Lennon 1990, Temple 2000 など)。つまり、「母語話者はこのように非流暢性を使用していて、それがコミュニケーションで役立っているので、みなさんも使ってみましょう」という単純な話ではないということである。

近年の社会文化主義的なパラダイムに基づいた第二言語習得研究では、第二言語話者(以下L2話者)の自律的な話者像の選択、すなわちどのようなL2話者でありたいかというアイデンティティの問題が注目されている。例えば、L2話者は必ずしも母語話者らしく話すことを目指しているのではな

く自らのアイデンティティを活用しながらL2話者としてそれを再構築しているという考察（山元 2019）や、言語運用と自ら選択するキャラ付けの関わりを論じた研究（定延 2020）などが見られる。

どのような非流暢性を学習項目に落とし込んでいくかという議論においても、まず発話に現れる「物理的な音や形態としては発話の流れを遮る要素」をL2話者はどう受け止め（perceive）ているのか（エラーや乱れとは認識されていないのか）だけではなく、その非流暢性をL2話者自身が使いたいと望んでいるのかどうかという視点からの考察も必要であると思われる。

## 5. 調査目的と調査課題

以上より、本研究では「母語話者発話に現れる非流暢性のうちどのような項目を学習項目とするかを探索的に探ること」を目的とし、そのためのアプローチとして、「学習者側から見た、日本語母語話者発話に含まれる非流暢性の捉え方」に着目し、以下の調査課題を設定した。

**調査課題1** 具体的にどのような非流暢性を母語話者らしいと感じているのか

**調査課題2** その非流暢性を自分も使えるようになりたいと感じているのか

**調査課題3** 運用意向の高い非流暢性にはどのような特徴があるのか

なお、本稿 4. で述べたように本研究では非流暢性の学習項目化の検討に際して、学習者自身が望んでいるのかを重視する立場を取っているため、上記調査課題 2 で「使えるようになりたい」という非流暢性が現れた場合に、調査課題 3 へ進むものとする。

## 6. 調査概要

調査は日本国内の某大学の中級クラスに在籍する留学生23名に対し、授業内活動の一部として行った。うち10名に対する調査は2022年7月に、13名に対する調査は2023年1月に実施した。なお、調査の結果は学生の成績には一切影響しないこと、調査結果は学術目的でのみ使用すること、匿名性を守ることを説明し、同意を得られた学生のデータのみをここで記すものとする。調査に協力してくれた学生の母語を表1に記す。

【表 1】調査協力者の母語

|            |                                    |
|------------|------------------------------------|
| 2022 年 7 月 | 英語 (1)、チェコ語 (1)、中国語 (6)、ポーランド語 (2) |
| 2023 年 1 月 | イタリア語 (1)、英語 (4)、中国語 (7)、ドイツ語 (1)  |

当該授業は学期を通してすべてオンラインで行われた。この授業では学期の後半で2回(90分×2)にわたって「わたしのちょっと面白い話」を話すという授業を実施しており、その1回目の授業の前半で、オープンソースである「わたしのちょっと面白い話コーパス」<sup>2)</sup>から「ライスカバー」、「父の呼び方」、「ちょっとやっちゃった話」、「10月事件」の4作品の動画を視聴した。「ライスカバー」「父の呼び方」は日本語学習者のコーパス、「ちょっとやっちゃった話」「10月事件」は日本語母語話者のコーパスである。本調査の主眼は母語話者の非流暢性を学習者がどう捉えるかということであるが、母語話者の発話(標準刺激)のどのような点に母語話者らしさを感じるかを認識しやすくするために、比較刺激として学習者の発話も2作品視聴してもらった。4作品は長さにあまり差がないもの、話者の年齢が比較的近そうに見受けられるもの<sup>3)</sup>、動画に付記されているスクリプトが中級から中級後半レベル<sup>4)</sup>であることを目安として筆者が選択した。

まず4作品を2回ずつ視聴し、「ライスカバー」「父の呼び方」の話者の話し方と「ちょっとやっちゃった話」「10月事件」の話者の話し方にどのような違いがあったか、気づいたことをオンライン上のホワイトボードに書く時間を設けた。これは協働学習ではなく個人作業として行った。この際、着目すべき観点は一切与えず、とにかく違うと感じたことを自由に考えてもらった。その後、全員に順に自分の気づきを説明してもらった。さらに4作品のトランスクリプトをオンラインで配布し、追加で何か気づいた違いはあるか考えてもらい、出てきた気づきを同じようにホワイトボードに追記してもらった。なお、配布したトランスクリプトは動画上の字幕そのままではなく、字幕では割愛されていた短いフィラーや言い淀み、言い直しの部分などをできるだけそのまま表記したものである。さらにそれぞれの気づき項目のうち日本語母語話者に関する気づき、例えば「母語話者の方が話し方が速い」などについて、自分もそのように話したいかどうかを直感でyes/noでリアクションしてもらった。当該授業はすべて録画した。

## 7. 結果と考察

本稿5. の調査課題に対応するかたちで以下、結果を考察を記す。

### 7.1 学習者が「母語話者らしい」と感じる非流暢性

学習者が気づいた違いをまとめたものが表2である。なお、内容が重複する言及は個別に記さずに一つにまとめ、延べ数を記した。例えば、「留学生の方が理解することができる」「留学生はわかる」「留学生は理解するのが易いです」などの気づきは、筆者を含む2名の日本語母語話者教師で内容が重複していると判断し、「留学生の方がわかりやすい」とした。なお、学生たちの表現は語彙的または文法的な誤りを含むものもあったが(例えば「ばくによって簡単な言葉」「話しているの感じ」) 文意が歪まない範囲で筆者が整えて記している。

【表2】学習者が気づいた学習者らしさ・母語話者らしさと運用の意向

| 学習者が気づいた違い<br>(※):トランスクリプトを見た後に追加されたもの                       | 延数 | 運用意向 | 「母語話者らしさ」 |
|--------------------------------------------------------------|----|------|-----------|
| (1) 留学生の話の方がわかりやすい                                           | 6  |      |           |
| (2) 留学生の方がゆっくり話している                                          | 15 |      |           |
| (3) 留学生は自分(聞き手の学生)にとって簡単な言葉を使っている                            | 3  |      |           |
| (4) 留学生は頭の中でゆっくり考えて文を作って話している感じ                              | 1  |      |           |
| (5) 留学生は事前に話したいことを準備している                                     | 1  |      |           |
| (6) 留学生は語順が正式で、教科書みたい                                        | 7  |      |           |
| (7) 留学生は「。(句点)」がたくさんある感じ                                     | 2  |      |           |
| (8) 留学生は学校で勉強した接続詞(そして、だから)をよく使う                             | 1  |      |           |
| (9) 留学生は、「あのー」などフィラーが多い                                      | 18 |      |           |
| (10) 留学生と日本人では面白いと思う点が違う                                     | 1  |      |           |
| (11) 母語話者の方が話し方が速い                                           | 22 | 22   | 速さ        |
| (12) 母語話者は、「～ちゃって」など口語でよく聞く表現があった                            | 12 | 11   | 口語的表現     |
| (13) 母語話者は関西弁?をときどき使っている                                     | 1  | 0    | 関西弁       |
| (14) 母語話者の方が「ま」「あのー」などフィラーが短い                                | 1  | 1    | フィラー      |
| (15) 母語話者はフィラーが少ない                                           | 17 | 14   |           |
| (16) 母語話者は「こうやって」や「ガッ」などと言って、具体的な様子はジェスチャーだけで伝えていて、詳しくしゃべらない | 5  | 2    | マルチモーダル   |
| (17) 母語話者は話しながらよく身振りをしている                                    | 3  | 1    |           |
| (18) 母語話者の話は動画では理解できたがトランスクリプトを見ただけではよくわからない(※)              | 1  | 0    |           |

|                                                            |    |    |            |
|------------------------------------------------------------|----|----|------------|
| (19) 母語話者は「え」「ちょ、待って」などセリフが多い                              | 2  | 2  | セリフの再現     |
| (20) 母語話者は「はっ」「バタン」などオノマトベ的な言葉が多い                          | 12 | 10 | オノマトベ      |
| (21) 母語話者（特に「10月事件」の話者）の話は、言葉がパズルみたいで、理解することが難しい           | 1  | 0  | 「正式」ではない印象 |
| (22) 母語話者は話す言葉の順番がぐちゃぐちゃ                                   | 12 | 9  |            |
| (23) 母語話者は教科書通りに話さない                                       | 17 | 17 | 長いセンテンス    |
| (24) 母語話者は即興的に話しているので、話しながら次に言うことを考えているので、「で」が多いのかもしれない(※) | 1  | 1  |            |
| (25) 母語話者は「って」をよく使う(※)                                     | 8  | 8  |            |
| (26) 母語話者は「ってなって」をよく使う(※)                                  | 1  | 1  |            |
| (27) 母語話者は話している時、「て」「で」をよく使うので、センテンスがいつ終わるのかわかりにくい(※)      | 11 | 7  |            |
| (28) 母語話者は「～て」「～、で」をよく使っていて、それはたぶんまだ話が続くというサイン(※)          | 1  | 1  |            |

(11) - (28) は母語話者の特徴についての気づきである。筆者を含む日本語母語話者3名で授業の動画とホワイトボードの記述を検討し、気づきの中で類似していると思われるものをまとめ、まとまりを代表する概念をキーワードとして表中右列「母語話者らしさ」に記した。気づきの収集時には注目する観点は与えなかったものの、観察可能な非流暢性を「物理的な音や形態としては発話の流れを遮る要素であるもの」と捉えれば、(14) (15) 「フィラー」、(21) - (23) 「『正式』ではない印象」が日本語母語話者らしい非流暢性として気づかれた。

## 7.2 学習者が「自分も使えるようになりたい」と感じる非流暢性

表2中の「運用意向」は、自分もそのように話したいかどうかをyes/noで直感的にリアクションしてもらったうちのyesと答えた数である。「フィラー」、「『正式』ではない印象」ともに、母語話者らしいと気づいた学生の多くは、自分もそのように話したいと感じていることがうかがえた。運用意向が高い項目が現れたため、以下、調査課題3（運用意向の高い非流暢性にはどのような特徴があるのか）の考察に進む。

## 7.3 運用意向の高い非流暢性の特徴

### 7.3.1 学習者が「フィラー」に見る母語話者らしさ

実際のフィラーの使用回数は「ライスカバー」の話者が1回、「父の呼び方」の話者が22回、「ちょっとやっちゃった話」の話者が20回、「10月事件」の話者が39回であり、日本語母語話者のフィラーが顕著に少ないわけではなかった。そこで、聞き手の心象としてフィラーの出現を少なく感じた原因を考察するために、4つの動画のなかで現れたフィラーの形式とその機能を前述の筆者を含む日本語母語話者3名で分類した。その結果を表5に示す。なお、フィラーの認定基準は山根(2002)を基にした小出(2009:14)を用いた(表3)。

【表3】フィラーの認定基準(小出 2009:14)

- 
- |                                    |
|------------------------------------|
| a. 実時間的に発話やその他の行動に伴って現れる音声         |
| b. それ自身は命題的な内容を持たないし命題とのかかわりも持たない  |
| c. 文のモダリティ要素でもないしモダリティ要素との関わりを持たない |
| d. 談話標識(談話の組織を形成する要素)でもない          |
| e. 単独では文としての価値を持たない                |
- 

また「で」「でー」が接続詞かフィラーかについては、百瀬(2020)を参考にして判断した。百瀬(2020)ではまず文頭に現れるか(接続詞)文中に現れるか(接続詞系フィラー)という統語的条件によって選別したうえで、6名の日本語母語話者にトランスクリプトを示し、その語がなくても文意がわかる箇所に印をつけるよう依頼し、6名の印が重複したものをフィラーとみなすという手順を踏んでいる。本研究では、統語的条件による選別の後、筆者を含む日本語母語話者2名で「この『で／でー』がなくても文意がわかるか」を判断し、2名の判断が一致して「なくてもわかる」となったものをフィラーとした。

表4中には接続詞とみなした「で」の出現数も付した。機能の解釈に関しては、「あのー」「まあ」「えーと」「えー」「こう」「なんか」「もう」については小出(2009)を、「はい」「うん」については山根(2002)を援用し、「で／でー」「そう」は筆者を含む日本語母語話者2名で機能を記した。

【表 4】 動画の中で観察されたフィラーの形式と機能

| 題目              | フィラー形式<br>(出現数)                                | 現れ方の例                                                                                         | 機能                                                         |
|-----------------|------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|
| ライスカパー          | あのー (1回)                                       | •メニューを見て、 <u>あのー</u> 、外<br>来語がいっぱい                                                            | 長期記憶内の特定の情報を<br>探索している (指示詞由来系<br>フィラー)                    |
| 父の呼び方           | えー / え (3回)<br>えーと (1回)<br>えっと (2回)<br>えと (5回) | • <u>えー</u> 、小学校3年生の時は<br>• <u>えーと</u> 、北京に転校した<br>• <u>えっと</u> 、転校したあとで<br>• <u>えと</u> 、北の方で | 情報や表現形式を形成する<br>ための心的活動に入ろうとす<br>る状態にあることを示す (専<br>用系フィラー) |
|                 | なんか (9回)                                       | • <u>なんか</u> 、先生は急に                                                                           | 導入情報と話し手のかかわり<br>の曖昧化・間接化 (副詞由<br>来系フィラー)                  |
|                 | はい (2回)                                        | •全然違います、 <u>はい</u>                                                                            | 自分の先行発話に対する話<br>し手自身の納得を表明                                 |
| ちょっと<br>やっちゃった話 | えーと (1回)                                       | • <u>えーと</u> 、これは                                                                             | 情報や表現形式を形成する<br>ための心的活動に入ろうとす<br>る状態にあることを示す (専<br>用系フィラー) |
|                 | あの/あのー (6回)                                    | •顔の、 <u>あの</u> 、真ん中から、 <u>あ<br/>のー</u> 、ヘアバンドを                                                | 長期記憶内の特定の情報を<br>探索している (指示詞由来系<br>フィラー)                    |
|                 | まあ (2回)                                        | •友達の家にも、泊まりに行った<br>時の話なんですけど、 <u>まあ</u> 、<br>その友達は、普通の                                        | 自分の先行発話に注釈的<br>内容を付加する (副詞由来系<br>フィラー)                     |
|                 | なんか (6回)                                       | •けど、 <u>なんか</u> 、ヘアバンドを使っ<br>てなくて                                                             | 導入情報と話し手のかかわり<br>の曖昧化・間接化 (副詞由<br>来系フィラー)                  |
|                 | こう (1回)                                        | •なんか、 <u>こう</u> 、パニックに、軽<br>いパニックになって                                                         | イメージを表現する形式の模<br>索が行われていることを示す<br>(指示詞由来系フィラー)             |
|                 | うん (1回)                                        | •普通の日本人の、あのー、 <u>う<br/>ん</u> 、お友達で                                                            | 自分の先行発話に対する話<br>し手自身の納得を表明                                 |
|                 | で/でー (3回)<br>*接続詞は7回                           | •髪を上げてやるんですけど、<br><u>で</u> 、それやって                                                             | 内容のマイナーチェンジのき<br>っかけ                                       |
| 10月事件           | えっと (1回)                                       | • <u>えっと</u> 、去年の10月くらいの話<br>なんですけど、                                                          | 情報や表現形式を形成する<br>ための心的活動に入ろうとす<br>る状態にあることを示す (専<br>用系フィラー) |
|                 | えー (1回)                                        | •すごい、 <u>えー</u> 、もう、すごい<br>颯爽と                                                                |                                                            |
|                 | なんか (13回)                                      | • <u>なんか</u> チームラボっていう、 <u>な<br/>んか</u> すごいイベントとかも                                            | 導入情報と話し手のかかわり<br>の曖昧化・間接化 (副詞由<br>来系フィラー)                  |

|       |                       |                                                     |                                        |
|-------|-----------------------|-----------------------------------------------------|----------------------------------------|
| 10月事件 | あー /あの/あの一 (7回)       | •次の、 <u>あの</u> 、前日になって                              | 長期記憶内の特定の情報を探索している (指示詞由来系フィラー)        |
|       | もう(4回)                | • <u>もう</u> 、完璧に準備してて<br>•すごい、えー、 <u>もう</u> 、すごい颯爽と | 話題の事柄が特筆すべき経験だとする姿勢を示す (副詞由来系フィラー)     |
|       | そう(1回)                | • <u>はく</u> 、すごい、あ、 <u>そう</u> 、す、すごい                | 自分の先行発話で既出であることの確認                     |
|       | まあ(2回)                | • <u>まあ</u> 、それを僕は10月の、10月3日の政変って呼んでます              | 自らの見解や主張を暫定的なものとして和らげて提示する (副詞由来系フィラー) |
|       | で/でー (10回)<br>*接続詞は3回 | •帰られて、 <u>で</u> 、 <u>はく</u> 、夜ご飯とかも予約してて            | 内容のマイナーチェンジのきっかけ                       |

「ライスカバー」の話者は極端にフィラーが少なかったため、ここでフィラーの比較対象からは除く。日本語母語話者と学習者 (「父の呼び方」の話者) のフィラーを比較すると、母語話者は (i) 「えーと」系フィラーが少なくア系フィラーが多い、(ii) フィラーのバリエーションが豊富である、(iii) フィラー化した「で/でー」が多い、という傾向が見られた。

(i) に関して、学習者は「えー / え」「えーと」「えっと」「えと」が極めて多く、これらが発話中最初から最後まで断続的に現れた。指示詞由来のコソア系フィラーが話し手の頭の中にある内容や先行する発話内容を何らかのかたちで指していることが多いのに対し、「えーと」系フィラーはフィラーのみに現れる「専用系」(小出 2009) で、「話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働く」(定延・田窪 1995 : 74-79)、自己思考型が強い「内向型操作標識」(定延・田窪 1993) である。この「えーと」系フィラーの母語話者発話での現れ方を見ると、「ちょっとやっちゃった話」の話者は冒頭に1回のみ、「10月事件」の話者は冒頭1回と中盤1回のみであった。一方、母語話者では「あの/あの一」の使用が繰り返し見られた。「あの/あの一」はコソア系の指示詞由来系のフィラーの中でも、「聞き手の存在を予定している」(定延・田窪 1993 : 22) 他者への指向性が高いフィラーであり、聞き手に発話遮断の感覚を与えにくいものである。今回の動画内で、学習者が「えー / え」「えーと」「えっと」「えと」と発した文脈では、その多くで「あの/あの一」への入れ替えが可能に思えたが、実際の発話では「えーと」系フィラーに偏っていた。

また、(ii)に関して、学習者の発話はほぼ「えーと」系と「なんか」の繰り返しであったのに対し、母語話者は先述の「あの/あのー」や「まあ」、後述する「で/でー」の多用など、フィラーの種類が豊富であった。

(iii)に挙げた「で/でー」については表2中の(24)、(27)、(28)を見ると、一部の学習者は母語話者がこれらを多用していることには気づいていたと推測されるが、学習者のなかではフィラーとして認識されていなかった可能性がある。先述のように本研究では「で/でー」をフィラーとみなすかどうかを操作的に線引きしたが、学習者の中でこれらがフィラーとみなされていなかった場合、それによって「母語話者はフィラーが少ない」という印象が形成されたのかもしれない。

「母語話者らしい」と聞き手（学習者）が感じるフィラーの使い方について、表2中の運用意向を見ると、母語話者のように運用したいという学習者は多い。これに応えるためには、(a)母語話者はフィラーが少ないわけではなくさまざまなバリエーションを使っているという気づきの促し、(b)ア系のフィラーや「で/でー」の運用の仕方を授業等で取り上げていく、などの取り組みが有用である可能性がある。

### 7.3.2 学習者が『正式』ではない印象に見る母語話者らしさ

表2中の(21) - (23)を『正式』ではない印象という「母語話者らしさ」で括ったが、(23)の「母語話者は教科書通りに話さない」は包含し得る具体的な言語行動が本調査では特定しきれないため、ここでは(21)、(22)で言及されている語順に着目し、以下、考察を進める。学生たちが特に具体的に指摘したのは、[泊まりに行ったときに、と、顔を、朝か夜か忘れたんですが、顔を洗いに洗面台に行って]（やっちゃった話）のように情報が挿入されている部分や、[わたしが先に洗って、顔を]（やっちゃった話）、[迎えに行って、で、デートしたんですよ、午前中は、順調に、浅草で行ったりして] [チームラボっていう、すごいイベントとかも、チケット取ってて、4時くらいから]（10月事件）など語順のスクランプリングが起きている部分であった。語順については、英語や中国語、スペイン語などのSVO型の言語話者でも思考の順序はSOVであるとしたGoldin-Meadow et al. (2008)がひとつの契機となり、近年は思考の順序との関わりに注目が高まっている。思考の順序と語順に関する一連の研究はまだ萌芽期にあり、先行研

究の知見を日本語の考察に援用するにはまだ慎重にならなければならないが、日本語は比較的語順が自由な言語であり、格助詞や文法的意味機能をもつ形態素が内容語とひとまとまりのチャンクを成していれば、[わたしが先に洗って、顔を]、[迎えに行って、で、デートしたんですよ、午前中は、順調に、浅草で行ったりして]のように思い浮かんだ順に産出することが可能な言語である。表2の(22)の言及を借りれば、それは学習者にとっては「言葉の順番がぐちゃぐちゃ」ということになるが、それは学習者に「正式な」統語規則の基準があるためであると考えられる。その基準は学習者がこれまでに学んだ教材によって形作られたのかもしれないし、本調査の協力者23名の母語が、語順が文意に重要な役割を果たす孤立語もしくは屈折語であったことが影響している可能性もあるが、本研究で得られたデータからはその点は明らかにはできない。

「語順がぐちゃぐちゃ」という「非流暢性」の運用意向をもつ学習者に対応するためには、例えば思考の順序のままに産出された自然な日本語素材との接触を増やしていくことや、また学習者自身も思考の順序のままに言葉を並べてもそれは「正式じゃない」わけではないこと、日本語では語順より意味を大きく左右する形態素(特に助詞や「れる/られる」などの文法的形態素)の正しい運用が重要であることをこれまで以上に現場で取り上げていくことが肝要なのではないだろうか。ただし、語順のスクランプリングが起こりやすい日本語でも意味理解に支障を与える境界はあり、許容される範囲内でのスクランブルを含むインプットを取り上げるよう留意せねばならないだろう。

## 8. 本研究の限界と今後に向けて

本稿はCSとして機能する非流暢性の概念を再整理したうえで、「母語話者発話に現れる非流暢性のうちどのような項目を学習項目とするかを探索的に探ること」を目的とし、母語話者の発話に現れる非流暢性を学習者はどのように受け止めているのか、それを自分も運用したいと感じているのかを調査、分析したものである。

まずは本研究の限界を記す。今回は言語使用状況や、視聴した動画の内容や数、調査に協力してくれた学生の人数やレベル、母語など、さまざまな面で条件が限られており、それらの条件が変われば、学習者が「母語話

者らしい」と感じる項目や、それに含まれる非流暢性の項目は変わると思われる。本稿3. で、CSとして機能する非流暢性の検討には「知覚される流暢性」という視座、すなわち聞き手がその非流暢性をスムーズな情報伝達を遮るものと感じるかどうかという側面が重要であると述べたが、ある発話が非流暢であるかどうかという感じ方は、同一の話し手、同一の聞き手であっても、言語使用状況や話し手との関係性などさまざまな要素によって変化する。定延（2024：14）は「話し手はコミュニケーションの状況の中で立場を変え、それに応じて流暢にも非流暢にもなる」と述べているが、ある発話が流暢であるかどうかという問いには常に「このケースにおいては」という限定が伴うことは避けられず、本研究で行なった考察も、今回の調査データ内において示された結果という枠を出ることはできない。

一方で、学習者から見て「母語話者らしい」と受け止められ、かつ運用意向が高い傾向が見られた、（形式的には）非流暢である項目について、いくつかの示唆が得られたことは本研究の成果である。内向型のフィラーが少なく、フィラーのバリエーションが多いこと、「正式ではない」語順での発話が母語話者らしさの印象に関わっており、運用意向も高い傾向にあることが示唆された。ただし、運用意向についてはあくまで「傾向」であり、例えば母語話者を規範とした語順のスクランプリングを全ての学習者が自分も使いたいと感じていたわけではない。非流暢性を教育現場に落とし込む際は、学習項目の検討と同時に、現場ごと学習者ごとのニーズの把握や、柔軟なコースデザインや授業デザイン（例えば、その非流暢性を学ぶかどうかについて学習者側に選択権があるような提供の仕方）の検討も重要となる。どのような非流暢性をどのように教育現場で扱うかという議論には、今後さらなるデータの蓄積や分析が必要であるが、本稿がその議論の一助になれば幸いである。

#### 注：

<sup>1</sup> Lickley（2015）では、この3分類がplanning fluency, surface fluency, perceived fluencyと表現されている。

<sup>2</sup> <https://www.speech-data.jp/chotto/history.html>

<sup>3</sup> オープンソースでは話者の母語や年齢などのバックグラウンドの情報は開示されていない。

- <sup>4</sup> 難易度の判定には科研費(課題番号 25370573)の成果物である「日本語文章難易度判別システム」(<http://jreadability.net>)、およびリーディングチュウ太(<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>)を使用した。

## 参考文献

- 小出慶一(2009)「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究」『日本アジア研究』6, pp. 1-37.
- 定延利之・田窪行則(1993)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識『ええと』と『あの(ー)』—」, 『平成4年度『日本語音声』E12 班研究成果報告書』, pp. 15-33.
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識『ええと』と『あの(ー)』—」『言語研究』108, pp. 74-93.
- 定延利之(2020)『コミュニケーションと言語におけるキャラ』三省堂
- 定延利之(2024)「発話の(非)流暢性への総合的なアプローチ」定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・船橋瑞貴・林良子・モクタリ明子(編)『流暢性と非流暢性』pp. 3-23. ひつじ書房
- 伝康晴(2007)「発話冒頭付近での語句の繰り返しの機能」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『文と発話3: 時間の中の文と発話』pp. 103-133. ひつじ書房
- 伝康晴・渡辺美知子(2009)「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能」『音声研究』13, pp. 53-64.
- 船橋瑞貴(2019)「日本語教育に非流暢性を取り入れる—挿入構造を例として—」社会言語科学会第1回シンポジウム『非流暢性から言語とコミュニケーションを考える』
- 船橋瑞貴・小西円・平田未季・宮永愛子(2021)「『φ助詞』で開始される発話」社会言語科学会 第45回大会ワークショップ『日本語教育と非流暢性—その言語的な実現と相互行為上の役割に注目して—』
- 松下仁美・香川真人・山村祐之・岡田美智男(2018)「非流暢性を伴うロボット(Talking-Ally)の発話調整方略とその聞き手に対する適応に関する研究」『ヒューマンインターフェース学会論文誌』20(2), pp. 255-268.
- 丸山岳彦(2014)「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分

- 析』『日本語文法』 14 (1) , pp. 88-104.
- 丸山岳彦(2021)「自問発話の形式と機能」『ことばと文字』 14, pp. 13-22.
- 百瀬みのり(2020)「フィラー的用法の『で』, 『あの(ー)』, 『え(ー)』, 『ま(ー)』のインタビュー談話における出現率について」『三重大学国際交流センター紀要』 15, pp. 33-47.
- 山元淑乃 (2019)「非ネイティブスピーカー志向の第二言語習得－日本人英語学習者Aの語りの分析を通して－」『言語文化教育研究』 17, pp. 360-381.
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- Goldin-Meadow, S., So, W. C., Ozyurek, A., & Mylander, C. (2008). The natural order of events: How speakers of different languages represent events nonverbally. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 105, pp. 9163–9168.
- Kormos, J. (2006). *Speech production and second language acquisition*. NJ: Lawrence Erlbaum.
- Lennon, P. (1990). Investigating fluency in EFL: A quantitative approach. *Language Learning*, 40, pp. 387-417.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From Intention to Articulation*. MIT Press.
- Lickley, R. J. (2015). Fluency and disfluency, In Melissa A. Redford (Ed.), *The Handbook of Speech Production* (pp. 445-474). NJ: Wiley-Blackwell.
- Segalowitz, N. (2010). *Cognitive bases of second language fluency*. New York: Routledge.
- Temple, L. (2000). Second language learner speech production. *Studia Linguistica*, 54 (2), 288-297.
- Watanabe, M (2003). The constituent complexity and types of fillers in Japanese. *Proceedings of the 15th International Congress of Phonetic Sciences*, pp. 2473-2476.

## Perceived ‘Native-Likeness’ of Japanese Native Speakers’ Disfluency by Learners and Their Intentions for Its Usage

SATO, Junko

It has become widely recognized that native speakers’ utterances includes’ a noteworthy number of disfluency such as pauses, fillers and repairs. In addition, it has been increasingly recognized that certain disfluencies do not stem from a lack of linguistic competence or errors but rather serve functional roles in facilitating effective communication. Such disfluency, however, are rarely addressed as teaching/learning items in Japanese language classes. To deepen the discussion on how to incorporate disfluency into educational settings in the future, this study takes an exploratory approach from the perspective of how learners perceive the disfluency used by native speakers, which has not been focused on in previous studies.

The survey targeted 23 intermediate Japanese learners. It found that native speakers’ usage of fillers and scrambled sentences is perceived as a part of ‘native-speaker-like’ way of speaking. Also, the result indicates the learners’ desire to acquire ‘phonetic fillers that are short and minimally disruptive to the flow of speech’ and ‘utterances with word orders that are not textbook-formal.’